

長谷川武次郎に協力した外国人たち

一書店員の目から見た縮緬本

猪股正孝

このたび、私どもはこれまで市場に出回ることが少なく入手が困難であった縮緬本ドイツ語版日本昔噺をまとめて入手することができました。そして京都外国語大学図書館でこれまで未所蔵になっていた数点を納入する機会をえて、このシリーズの12巻までを完備することに貢献できました。

不思議なことに、今回の『浦島太郎』などはいずれもシブロック訳、昭和6年の刊行ですが、手元にある『桃太郎』（初版、明治18年）にあるような第16版（昭和6年）、の記述が見当たりません。まるでこの昭和6年版が初版のような書き方です。国際交流基金図書館の所蔵一覧を拝見すると、第1～12巻まですべて刊行年は昭和6年（1931年）で、最初の4巻と第10巻を除いて版の表示がありません。CiNiiで見える限り、他機関の所蔵も同様です。もしかしたらこれらの巻が企画・予告されたもの実際には出版されなかったという推測もできるでしょうか。それがフランス語版に比べても所蔵が少ない理由かも知れません。

私どもは洋書輸入を本業としていますので、縮緬本に関する情報収集は主に海外古書店のカタログに頼ることになりますが、その際、問題になるのが版次と刊行年の特定です。ご承知のように縮緬本の英文のタイトルページには刊行年の記載がなく、日本語の奥付に頼らなければなりません。しかし、奥付にある刊行年は日本の年号のみで西暦の記述はありません。彼らにこれが読めるはずがなく推測による刊行年の記述は当てになりません。結局は買ってみたいと特定できないということで結果的に重複本を買うはめになります。日本関係に詳しい老舗書店のカタログに載っている和書の写真の天地が逆になっているのも珍しいことではありません。フランス語版を買ってみたら袋綴じの部分がすべて切り離されておりました。昔のフランスの本は仮綴じ、アンカットで読むときにペーパーナイフで切り開く習慣があるということに思い当たることになりました。

取り扱った本で少し述べさせていただきますと、16歳の長谷川武次郎は宣教師カロザースの学校（後の明治学院）で熱心に英語を学んだと

言われます。その姿を見ていたという夫人ジュリア訳『日本の歳月』は大判の平紙・縮緬両用本で珍しい本の一つです。日本昔噺シリーズで世界的に有名になった長谷川は1900年のパリ万博に、日本の風景画にヴェルハーレンの詩を加えた平紙大型本『日本の情景』(Image japonaises, 1896)を出品、見事金メダルを受賞します。この版は稀覯で所蔵するのは国会図書館だけのようですが、実はもう一つ、奥付はあるもののテキスト部分が白抜きとなった絵だけの試作本と思われる版本が存在します。輸入雑貨店を営んでいた長谷川の実家の長兄西宮松之助が出版人の英文東京地図（1884年）もあります。筑地居留区の詳細な街路、各派キリスト教会とミッションスクールの所在地、条約による居住・通行制限区域、が明示されております。

ところで長谷川版縮緬本は何時ごろまで刊行されたものでしょうか。手元にタムソン『かちかち山』の昭和30年版がありますが、版は第16版、住所表記は戦前の「下谷区上根岸町17番地」のままなので昭和7年刊行の再刷と思われる。本当にすべての本が16版まで出たのか、どれくらいの頻度で印刷されたのか疑問もありますが、この1930年代が最終版と見れば1885年から45年前後、明治中期から昭和初期までが縮緬本の刊行時期と見られるものと思います。

これまで素人の目に映った縮緬本について羅列してきましたが、縮緬本の研究、収集においては、これまでの先駆者の労苦にもかかわらず、未開拓の部分が多いように思われます。日本昔噺シリーズにしても英文以外の言語の書誌が不足ですし、京都外国語大学が唯一所蔵していると思われる上方縮緬本「松室八千三版」についても限られた紹介しかありません。さらには長谷川武次郎という稀代の革新的企業家が、お雇い外国人・宣教師に学び、そのノウハウを縮緬本という輸出商品に結晶させて海外に日本文化を発信し続けた功績にもっと光があてられるべきではないかとも考えます。

いのまた まさたか（極東書店）